

教師たちの戦後

Teachers in Kobe in the Post War Period

洲 脇 一 郎

要 旨

戦時下の教育を担った教師たちは戦後にどう向き合ったのか。戦後の教育改革の中で教師たちの行動をたどる。新教育への対応、教員適格審査の実施、教員組合の結成、教育委員会制度の発足と委員の公選、戦災孤児の収容などがどのように行われたかを通して、教師たちの思想と行動が戦前と戦後で連続するのか、あるいは断絶するのかを検証する。

キーワード：教員適格審査 教員組合 教育委員の選挙 戦災孤児

はじめに～戦前と戦後の奇妙な共存

敗戦直後の神戸の教員が向き合わなければならなかった現実はどのようなものだったのだろうか。人口・児童生徒数の急激な減少、教員数の減少、被災や転用によって荒廃した校舎、教育の非軍国主義化と民主化という教育改革、6・3・3制の実施、教員組合の結成、教員適格審査の実施、教育委員会制度の発足などであり、戦前の教育と大きな断絶があった。こうした戦後教育が実施される過程において教員たちはどのように考え、どう行動したのだろうか。変革に従順に服従したのはなぜだろうか。¹⁾

敗戦後の学校日誌には戦前的なものと戦後的なものが奇妙に共存している。菊水国民学校の学校日誌をみてみよう。学童疎開からの引き揚げに忙殺されるなかで、1945年10月30日には「教育勅語下賜記念日訓話」が行われ、11月3日は「明治節遙拝式」があった。46年1月1日には「新年遙拝式」が、2月11日には「紀元節遙拝式」が執り行われた。その一方で新たな教育への胎動が始まっている。45年11月22日に職員会で校長会伝達事項として文部省の教育方針についての話が教員に知らされた。11月28日には兵庫師範学校で新たな教育について講習会があった。12月1日には「文化講演会」が開催された。46年1月14日に「民主主義研修会」があった。「文化講演会」は神戸市主催の教育文化講座のことで45年12月から46年3月まで週1回開催された。「民主主義研修会」は民主教育研究会でありこれも行政主催のものであった。2月6日

に「神戸市教員組合結成式」があった。2月24日「進駐軍幹部四名来校」、2月24日「進駐軍慰安学芸会」と続く。敗戦以降まことに目まぐるしい動きである。

こうした動きの中で教員はどう考えていたのだろうか。一つの例をあげたい。学童疎開についてある教員は次のように語っている。(子どもたちは)「疎開生活は辛い但日本が勝つ為には仕方がない。辛抱する。そして勝って懐かしい親のいる我が家に帰るんだという気持で1年3ヶ月を送ったと思っている。…よくもまあ、あんな大嘘が云えたものだ。」と述べ、自責の念に苦しんだと告白している。疎開当時下山手国民学校の付添教員であった武本力が35年後に学童疎開の記念文集に寄せた述懐である。これほど率直な告白を文章で残した例はあまりない。²⁾

灰谷健次郎の『兎の眼』には、戦時中から教員であった先輩教員を戦後に教員になって軍国主義教育には関わらなかった教員が揶揄する場面がある。この若い教員のような意識は広く行き渡っていたのだろうか。それとも灰谷の小説の登場人物のような、学校の主流から離れた教員の考えに過ぎなかったのだろうか。³⁾

戦後に教員がどのように歩んだかについては、まず児童生徒の実態を調べることから始めなければならない。

1 敗戦直後の児童と教員

空襲による住宅の破壊、食糧難などによって、神戸市の人口は1940年の96万7千人(昭和15年国勢調査)から1945年8月には38万人弱にまで減少した。児童、生徒数は国民学校の児童数は1943年の131,601人から1945年34,638人、市立の中等学校(中学校、高等女学校)は1943年9,650人から1945年5,971人にそれぞれ減少した(『神戸市教育史 第二集』)。1945年の国民学校の児童数34,638人はどの時点の数字なのか明らかでない。神戸市が作成した「国民学校児童収容替臨時措置案」は45年の11月10日の時点で38,697人の数字をあげている。かなりのずれがあるが、調査時点での差異であると理解したい。いずれにしても10万人近い児童が減少したわけである。⁴⁾

戦時下の生活がいかに子どもたちに影響を与えたかは体位の低下に端的に表れている。表1は児童の身体検査によって、身長、体重の結果を示したものである。1947年の身長の数値は各学年とも戦前に比較して3～5センチメートル低下している。体重も同様に1～2キログラム低下している。劣悪な食糧事情が児童の体位にいかにか大きな影響を与えたことを知ることができる。山手国民学校と二葉国民学校の学童疎開の際の献立が残されているが、それをみても食糧の窮迫の度合いが分かるであろう。学童疎開のもっとも多い記憶は空腹であった。それはなにも集団疎開児童に限られていたわけではない。戦後においても食糧問題はまことに深刻で、1945年のまれにみる不作が追い打ちをかけたため46年には日本全体が飢餓線上をさまようことになったのであった。⁵⁾

次に教員の状況をみておこう。教員数をみると、国民学校は1943年2,936人が1945年1,268人

表1 身体検査成績（小学校）

年次	身 長						体 重					
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1947・男	106.5	112.3	116.0	120.6	124.4	129.1	17.3	19.4	21.2	23.1	25.2	27.0
	106.1	110.7	114.8	119.7	124.7	129.8	17.2	19.0	21.0	22.7	24.6	26.1
1943・男	108.9	113.8	119.0	124.1	128.5	134.0	18.0	19.5	21.9	24.3	26.2	28.6
	108.0	112.9	120.4	123.0	127.8	131.3	17.4	18.8	21.0	22.7	25.7	28.6
1941・男	109.6	115.3	119.7	124.5	129.1	133.8	18.1	20.2	22.3	24.2	26.6	29.3
	108.8	113.8	118.9	123.9	129.0	134.6	17.7	19.4	21.6	23.1	26.2	29.8
1939・男	109.9	116.3	120.2	125.0	129.4	134.4	18.3	20.3	22.4	24.5	27.0	29.7
	111.1	114.1	118.8	121.8	129.0	134.7	17.8	19.7	21.7	24.0	26.8	30.0
1937・男	109.3	115.4	121.6	124.6	129.1	133.7	18.1	20.2	22.6	24.4	26.8	29.5
	108.7	113.7	118.9	125.4	128.8	134.0	17.6	19.5	21.7	23.8	26.6	29.7

出典：『神戸市統計書』昭和22年。

（高等科を含む）に激減した。他府県への転出や退職が激増したこと、児童数の激減に対応するために教員の転出、退職が促進されたことなどによる。⁶⁾ 表2は「昭和二十一年五月一日現在 教員台帳」から国民学校の初等科の教員数をみたものである。校長を兼務させて校長を配置しない学校が14校ある。教員数の減少に対応する措置であった。校長を補佐する教頭や首席訓導の配置は、教頭30校、首席訓導7校である。残りの30校は教頭、首席訓導ともに配置していない（国民学校令では教頭は必置職員ではない。首席訓導は任意設置の職である）。市街地であって訓導の配置数が少ない学校は空襲の被害が大きかった学校である。宮本、小野柄、脇浜、多聞、西兵庫、大開、道場などは極端に教員数が減少しており空襲の被害が大きかったことが推定される。養護訓導は12校に配置されている。助教の配置は意外に少なく23人である。軍隊に召集されていてまだ復員していない者が31人いる。中にはこの教員台帳作成後に戦死公報が届いた例もある。

1946年1月に国民学校長32名が退職した。校長だけでなく古参の教頭も退職している。「教員ノ整理ヲ行フノヤムナキ状態ニ立到リ依ッテ…国民学校校長並教頭中…退職ヲ慫慂セン所現状ニ鑑ミ後進ニ道ヲ開クノ故ヲ以テ夫々退職ヲ出願セリ」と事情を述べている。一般教員については1945年9月頃以降50歳前後の古参の女子教員の退職出願が目立っている。具体的にどのように退職や転出の勧奨が行われたかはわからない。⁷⁾

敗戦以降の若手教員の退職の例を示すと、雲中国民学校の教員で岡山県の学童疎開の付添教員のうち2名は神戸市の教員を辞めた。疎開先の岡山県で新聞記者になったのである。鈴木健太郎（1945年当時34歳）と山口弘（35歳）である。二人とも御影師範卒で教育の道を歩んでいた人物である。山口弘は8年後に書いている「敗戦と同時に教員生活にピリオドを打とうと覚悟して、中山校長にお許を得た。…あれから八年！今は家業に茶とたばこの店を営みながら、夕刊岡山新聞社に籍をおき、今日まで親子五人がどうにか命だけは生き永らえて来た。」⁸⁾ 山

表2 国民学校の教員数（昭和21年5月1日現在）

番号	国民学校名	校長	兼務校長	教頭	首席訓導	訓導	養護訓導	助教	未復員	休職	合計	48年教員数
1	成徳	1				17			1		19	30
2	六甲	1				36		1			38	48
3	西郷	1		1		15			1	1	19	22
4	西灘	1		1		15	1		2		20	24
5	稗田	1		1		25		1			28	34
6	摩耶	1				28					29	35
7	福住		1	1		10					12	15
8	高羽	1		1		15					17	26
9	雲中	1				10	1				12	17
10	若菜		1	1		6					8	
11	筒井	1		1		5			1		8	(23)
12	二宮		1	1		8					10	24
13	宮本		1			6					7	
14	小野柄	1				8					9	11
15	脇浜		1			5			1		7	
16	吾妻	1		1		12	1	1			16	20
17	上筒井	1		1		9		1			12	19
18	神戸	1				8		1			10	18
19	諏訪山	1				16	1				18	25
20	山手	1		1		18			1		21	27
21	北野	1			1	6					8	16
22	下山手		1	1		13					15	21
23	湊川	1		1		9		1	2		14	22
24	橘		1			5					6	11
25	多聞		1			3					4	
26	東川崎	1		1		5	1				8	8
27	荒田	1			1	10			1		13	12
28	湊山	1				21					22	25
29	平野	1			1	27					29	34
30	菊水		1	1		20	1				23	22
31	鶴越	1				28			3		32	42
32	西兵庫	1				5		1	1		8	(18)
33	大開		1	1		3	1		3		9	
34	川池	1		1		21					23	38
35	中道	1		1		9					11	15
36	水木		1	1		9			1		12	13
37	入江	1				15					16	24
38	道場		1	1		3			1		6	
39	川中	1			1	4		1			7	
40	須佐	1				4	1	1			7	14
41	室内	1				27			3		31	29
42	浜山	1			1	21		2			25	29
43	遠矢		1			9			1		11	21
44	真陽	1				22				2	25	36
45	長楽	1		1		17					19	22
46	真野	1			1	16		1	1		19	27
47	御蔵			1		12					13	17
48	長田		1			14		1			16	21
49	神楽	1				12					13	18
50	志里池	1				13		1			15	20
51	蓮池	1		1		22	1	1			26	45
52	二葉	1				31			1		33	39
53	名倉	1				22		1			23	32
54	千歳	1		1		23			1		26	46
55	池田	1		1		13					15	22
56	西須磨	1		1		38			1		40	49
57	東須磨	1				20	1		1	3	26	23
58	板宿	1		1		23		2	2		29	35
59	大黒	1		1		11		1	1		15	18
60	若宮	1				7					8	17
61	妙法寺	1			1	9		1			12	13
62	多井畑	1				7					8	8
63	白川	1				2		2			5	5
64	塩屋	1		1		13					15	16
65	垂水	1		1		53				2	57	56
66	舞子	1				20	1	1			23	23
67	名谷	1				5					8	8

出典：「昭和二十一年五月一日現在 教員台帳 国民学校之部」から作成。48年教員数は、神戸市教育委員会編「教育委員会だより」2号、1949年。
 (注) 兼務校は①上筒井・福住②荒田・菊水③二宮・若菜④西兵庫・大開⑤筒井・脇浜・宮本⑥須佐・道場⑦浜山・遠矢⑧東川崎・橘・多聞
 ⑨池田・長田⑩中道・水木⑪高等科の学校長が尋常科の校長兼務がある。

1948年の学校再編は、①脇浜・筒井・宮本が統合して春日野小②二宮・若菜は統合して二宮小③多聞は湊川小に併置、などの措置が行われた。

手国民学校の教員でこれも岡山県に学童疎開に付き添っていた田中静子（20歳）も神戸市を退職し疎開地の岡山県久米郡竜山校の教員になった。1947年8月に神戸市の山手小学校に復帰した。教師を辞めようか、あるいは続けようか。神戸市の教員が児童数の減少で教員が余ったため退職勧奨もあったようだが、教師たちは悩んだに違いなからう。

1946年度には、5月1日より後に相当の教員の異動がある。転出や退職、転入や採用などである。したがって表2は教員数が減少した5月1日という時点での教員数の状況を示したものである。転入については国内の広い地域からの転入がみられるとともに外地からの転入もある。外地からの転入は、朝鮮の光州師範付属、京畿道の学校、中国の天津や満州からであった。なお、1945年9月1日から46年5月7日までに退職した教員は、兵庫県の国民学校で校長133人、教頭26人、教員2,762人、合計2,920人にもなっていた。⁹⁾

教員数は1946年度をボトムとして増加に転じる。47年1,517人、48年1,686人、49年1,810人になっている。教員の確保とともに教員の質が問題となってくる。

教員の質の低下については戦時中から指摘があった。1944年2月の神戸市会で宇野義夫議員は「正教員不足ノ対策ト致シマシテ助教ノ増加ハ加速度的ニ増大シテイル現状デアリマスガ、尤モ助教ノ中ニハ正教員ト何ラ異ナラヌ有為ノ士モ多イデアリマスケレドモ、何ト云ッテモ専門教育ヲ受ケタ人ノ手ニ依テ教育スルコトハ望マシイコトデアリマシテ・・・今日ノ制度ハ非常措置トハ申シナガラ、国家教育ノ上ヨリ考ヘマストキニ恟ニ遺憾ニ堪ヘナイ次第デアリマス、殊ニ中学校、女学校忽々ノ若年ノ諸氏ニ至ッテハ成程学科ノ指導ハ出来得ルト致シマシテモ、国民ノ基礎教育場トシテノ国民学校ノ最モ重点ヲ置カナケレバナラナイ国民精神ノ鍛練、

表3 小学校教員の出身・資格別調

1948年11月1日現在

	教諭	助教諭	計
大学 男	3	0	3
女	0	0	0
高専 男	11	1	12
女	11	2	13
師範 男	579	8	587
女	246	11	257
教養 男	11	0	11
女	114	3	117
検定 男	41	3	44
女	133	4	137
中等校男	11	118	129
女	7	228	235
その他	2	1	3
合計 男	657	131	788
女	512	246	760

出典：『神戸市教育年鑑 昭和23年度版』26, 27頁。

人格ノ修養ニ対シテハ遺憾ノ点ガアルト思フノデアリマス」と述べた。¹⁰⁾ 戦後の混乱はこうした教員の資質の問題に拍車をかけた。正規の教員を確保することが困難になり、旧制中学校卒業等の無資格者によって補わざるを得なかった。49年度に無資格者が最高に達し、小学校では男192名、女341名計533名となり全教員数の27%を占める状態となった。¹¹⁾ 表3は48年11月1日現在の小学校本科教員の出身学校別、資格別の調査である。助教は無免許であると考えてよからう。助教の比率は24.3%である。中学校や高等女学校の出身者はほとんどが助教である(95.1%)。小学校教育の本来的な担い手である師範学校出身の教諭の割合は53.3%にとどまっている。この表に「教養」と書かれているのは臨時教員養成所である。臨時教員養成所は戦時下の教員不足に対応するために1940年度に設置され、42年度からは県下の各地に臨時教員養成所を設置した。さらに43年度には国民学校在職中の助教の再教育を実施することにしたのであった。¹²⁾ 無資格の教員が多い状況に対処するため文部省は免許状の認定講習会の開催を企図したが日本教職員組合の反対にあつて、教員再教育講習会に変更された。神戸市は1945年12月から独自に教育文化講座や民主教育研究会を開催するなど現職教員の研修にも取り組んだ。

2 戦災孤児

野坂昭如『火垂るの墓』は1945年6月5日の空襲で身寄りを亡くした戦災孤児の兄妹が栄養失調で死んでゆく物語である。『兵庫県教育史』によると戦災孤児は86名のうち47名が神戸市の児童であった(『神戸市教育史』は約200人の戦災孤児があったとしている。)¹³⁾ 兵庫県は疎開学童の復帰にあたって「引揚困難ナル児童、戦災孤児等ハ合宿教育所ニ収容セシム」という方針を決定していた。兵庫県下2か所に「戦災孤児合宿教育所」を設置されることになった。神戸市は美囊郡三木町に有隣学舎を、尼崎市は有馬郡道場村に尼崎学園を開設した。有隣学舎は神戸市平野国民学校が集団疎開していた三木高等女学校の校舎を借り受けたものだった。1945年10月神戸市学童疎開引揚と同時に孤児を収容、正式の設置は同年12月6日であった。戦災孤児のほかに引揚げ孤児、海外引揚者の子弟などを収容することとされた。神戸市平野国民学校が管理を行い、名称を神戸市平野国民学校三木分教場有隣学舎とし、学舎長に平野国民学校校長長島淳一が就任した。

1945年11月15日付で神戸市総務局学事課長木戸只一は国民学校長に宛て次のような通知を發した。

戦災孤児等集団合宿教育ノ件

- 一 戦災孤児の収容は当分の間美囊郡三木の学童集団疎開跡を使用すること
- 二 各校の集団疎開引揚げ翌日其の校の職員引率の上三木高女内戦災学童収容本部に出頭其の指令を待つこと
- 三 出頭の際は本人と一緒に成るべく夜具を持参すること

猶学用品着替等の所持品も出来る限り持参すること

四 交通機関は加古川線を利用すること

1949年3月に発行された神戸市教育委員会編「教育委員会だより」3号に有隣学舎訪問記が掲載されている。このとき52人の孤児が施設にいた。訪問者は子どもたちと懇談し語る。「皆さんは本当に元気で快活ですが、いつまでもこの明朗さを失わないで下さい。実社会へ出てからは相当いろいろな苦痛や困難にぶつかるものですが、決してくぢけたり短気を起こしたりしないよう頑張ってくださいね。」付添教員の箸方は5年間正月に一度も家に帰ったことがないと校長から聞いてびっくりする。(5年間というのはおそらく集団疎開の期間も含めてであろう)箸方は「子供達は帰るお家がありませんからねえ」という。もう一人の付添教員の垂井について校長は「僕の青春の情熱をこの子供達の教育に捧げて後悔しない」といっていることを紹介する。そして教員たちは有隣学舎を出てからの子どもたちの将来を心配している。

訪問記に登場する箸方は箸方富久である。昭和20年度に36歳で学童疎開の引率教員として三木に疎開していた。そのまま有隣学舎で子どもたちの面倒をみることになったのであろう。学舎の最初の校長である長島淳一は1911年御影師範学校卒で当時の神戸の有力な校長の一人であった。熱心な教員たちが有隣学舎を支えていたのであろう。1951年に有隣学舎が児童福祉施設の有隣学園になったとき箸方富久は初代の園長に就任した。¹⁴⁾

戦災孤児のための施設は愛隣学舎だけではなかった。1949年1月の神戸市教育委員会「教育委員会だより」第2号には、春日野小学校の校区にある双葉学園の記事がある。双葉学園には140名の戦災孤児が収容されているが、そのうち29名は普通学級に在籍している。43名の戦災孤児は「戦後浮浪生活を続けたのと学力不足のため到底普通学級に入れることは不可能でこの気毒な子供達のために特殊学級を設け、一日も早く健全な子供に再生してくれるよう特殊教育を実施している」と述べている。戦災孤児の教育は困難な課題であったのである。

3 御真影と教育勅語

宗教に関する占領軍の政策は学校に大きな影響を与えた。敗戦前の1945年6月4日付で神戸市総務局長は各学校に対して「御真影奉拝ノ件」を指示した。御真影を空襲による被害から守るために空襲が予想されない学校に避難させたが、その奉遷先の学校に対して謝礼金を支給するので遺憾なきよう取り計らうようにという内容であった。各学校は御真影の死守に万全を期していた。それが戦前の教育であった。しかし1945年12月15日の占領軍の指令「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」によって御真影の返還が決定された。神戸市総務局長は12月26日に来年の拝賀式で御真影を奉掲しないこと、しかし敬虔、真摯に終始し教育上遺憾なきを期すること、調査報告書を提出することが校園長に指示された。¹⁵⁾

兵庫県では46年1月25日に「御真影奉還ニ関スル」通牒が発せられ、明治天皇以降全部の御真影の回収を2月4日に行うので地方事務所を持参することが指示された（神戸市の場合は御真影を疎開させていたので、疎開先の町村を管轄する地方事務所に奉還する。兵庫県知事岸田幸雄に宛てて「御真影奉還届」を提出することになっていた）。地方事務所は回収した御真影を焼却した。さらに御真影奉安殿については、神社様式のものには2月18日付の通牒で撤去が指示され、さらに7月13日付通牒で、形式にかかわらず一切の奉安殿の破壊・撤去が指示された。神戸市文教部長は市立校園長宛て「御真影奉安施設ニ関スル件」を発した（年月日を欠いているが、46年2月頃と推定される）。「貴校園ニ於ケル神道の象徴ハ先般指示ニ依リ全部撤去セララルコト、被存候処今般県教育民生部長ヨリ通牒ノ次第」もあるので、「神社様式ヲ有スル御真影奉安施設ハ速ニ撤去スルコト」「英霊室又ハ郷土室等ニ付テモ神道の象徴ハ速ニ撤去スルコト」などが指示され報告書の提出が求められた。¹⁶⁾

『兵庫県教育史』が述べるように御真影は「わが国国家主義教育の大きな柱」であったものが、一片の通牒によって廃棄されることになったのである。

教育勅語の取り扱いはまだ少し時間を要した。1946年10月8日の文部次官通牒によって儀式その他の際に読み聞かせることが抑止された。「教育勅語を以て我が国教育の唯一の淵源となす従来考へ方を去つて」「式日等に於て従来教育勅語を奉読することを慣例としたが、今後は之を読まないこととすること」としたが、なお勅語及び詔書は学校において保管すべきものとされた。教育勅語の扱いが最終的に決定されるのは、日本国憲法との関係が問題となり衆議院及び参議院で教育勅語に関する決議がなされたためである。47年6月19日に衆議院において「教育勅語等排除に関する決議」、参議院において「教育勅語等の失効確認に関する決議」がなされた。教育勅語等の「根本理念が主権在君並びに神話の国体観念に基いている」として詔勅の排除が衆議院で決議され、参議院は「既に効力を失っている事実を明確にするとともに、政府をして教育勅語その他の諸詔勅の謄本をもれなく回収せしめる」と決議した。「勅語等返還のこと」という文書が残されている学校もある。神戸市立志里池小学校では、神戸市教育局長宛てに「教育に関する勅語」「軍人に賜りたる勅語」「青少年学徒に賜りたる勅語」「戊申詔書」「教育者に賜りたる勅語」「小学校教員勅語」を1948年7月28日に提出し教育局長が受領証を発行している。教育者を呪縛していた勅語の回収の意味は大きいとみなければならぬであろう。¹⁷⁾

4 教員組合の結成

学校日誌によって教員組合の記事をみておく。菊水国民学校では1946年1月2日に「教員組合理事会」、2月1日「教員組合結成代議員会」が山手校で午後1時、2月6日「神戸市教員組合結成式」が諏訪山国民学校で午後1時より、2月15日に「神戸市教員組合常任会」などの記載がある。西郷国民学校では46年1月25日「国民学校教員組合西郷校代表互選」「岩橋訓導 午前十時ヨリ稗田校へ」、1月29日「岩橋訓導 教員組合委員会へ出席」、1月31日「教員組合

経過報告 岩橋訓導ヨリ」、2月1日「教員組合代表会議 山手校へ 岩橋訓導」、2月2日「教員組合創立経過報告」などの記事がある。46年になってにわかに組合結成の動きが活発化し、2月上旬に組合が創設されたと思われる。敗戦から5か月ほどで教員組合が結成されたことになる。『神戸教組35年のあゆみ』では「神戸市立国民学校教員組合」結成を2月17日としている。占領政策による労働組合育成と全国的な教員組合結成の動きに触発されたものであろう。¹⁸⁾

組合結成の頃と思われる、全市国民学校の教員に宛てられたビラがある。長文であるが神戸市の教育の歴史として重要な文書であるので全文を掲載したい。(原文のまま)¹⁹⁾

敗戦茲に半歳、世界史の要請は愈々出でて愈々至厳なり。誤れる軍国主義的機構は次々と崩壊を見つありと雖も祖国再建の業未だ遅々として緒に着かず。民心混迷世情騒然としてその帰する所を知らず。今にして文化国家への礎石を築かずば祖国の前途、民族の命脈誠に深憂に堪えざるものあり。文化国家への礎石は教育を措いて他なし。教育立国こそ祖国再建への絶体唯一の大道なり。職を教育に奉じる我等今日起たずんば何時の日にか起たん。

今や言論の自由は与えられたり。過去半世紀の強いられたる沈黙は終われり。我等は声を大にして叫ばん。曰く

- 一 実収五倍増額 抑も教育の振興こそ祖国再建の基礎たり。而して教育の振興は他なし、教育者の生活安定に在り。戦前既に俸給生活者の最低水準にありたる吾人の薄給を以てしては今日の如き狂気的な物価の昂騰に耐え得べくも非ず。市内千有余名の同僚その家族は文字通り餓死線上を彷徨しつゝあり。之を放置して何の教育ぞや。
- 二 学校給食の即時復活 「衣食足って礼節を知る」は千古を貫く至言なり。巷をさまよふ学童を捉へるには百の説法や千の訓戒も一椀の雑炊に如かざる現実を再思三考すべき時なり。その上にこそ明日の教育が成立し道義日本の建設も期待し得べし。
- 三 教育行政面への参加 教育の民主化こそ多年吾人の熱望せる所なるも独善的な機構は之を許さず。こゝに敢てこの機構を撤回し明朗なる教育の民主化を期せざるべからず。
- 四 学校施設の急速復旧 学校こそ文化日本建設の原泉なり。飲食店や享楽街の華々しい復興の反面、戦火に曝されたる学校の復興のみ未だに着手されざる現状なり。学校施設復興を求むる所以こゝにあり。
- 五 勤務の合理化 徒らなる時間の空費と煩雑なる事務とは吾人を肉体的に精神的に過度の疲労をなさしめつゝあり。合理的なる勤務の要請さるゝ故ありといふべし。
- 六 福利施設の改善強化 教員の共済組合の設立を見たるもその官僚的なんと手続の煩雑とは利用者を抑圧し殆ど有名無実に等し。さればここに健全なる福利施設をなし吾人の利用に便ならしむべし。我等は全市一千有余の国民学校教員を糾合し強力にして健全なる教員組合を結成し、新生教員組合の名に於て我々の至当なるこの要請の貫徹を期し以て教育立国実現に邁進せんとす。

全市国民学校教員諸君今ぞ起て!!

この当時の神戸市の教員組合の特色は政治的な傾向が少ないことであるといわれる。上述のビラも組合結成を呼び掛ける檄文としては穏健である。もう一つの特色は結成段階においては校長が組合に参加し組合長も校長が務めていたことである。初代の組合長は神戸国民学校長の田岡新、2代目組合長は西須磨国民学校長の中山延二であった。校長と教員、組合と教育行政が敵対的でなく融和的な関係であったとみられる。校長の職務と組合員の立場が抵触するとして組合に校長が参加しなくなっても、融和的な関係は後々まで神戸の教育の特色となったものである。校長の参加は組合の主張を穏健なものにしたであろうと推測される。

表4 神戸教員組合の役員

1946年2月17日～4月30日					
役職名	氏名	年齢	在籍校・職	経歴	1945年度の職務
組合長	田岡 新	57	神戸国民学校長	1911年御影師範卒	
副組合長	長島淳一	56	平野国民学校長	1911年御影師範卒	
〃	中山延二	52	雲中国民学校長	1915年御影師範卒	
事務局長	小柴弥作	34	諏訪山国民学校訓導	1933年御影師範卒	疎開付添
執行委員	吉田友三郎	34	山手国民学校訓導	1932年御影師範卒	疎開付添
〃	東 悦夫	34	入江国民学校訓導	1932年御影師範卒	残留（事務担当）
〃	小塚 誠	33	東灘国民学校訓導	1932年御影師範卒	不明
〃	小谷 強	34	雲中国民学校訓導	1932年姫路師範卒	残留
財務委員	浜田芳郎	34	神戸国民学校訓導	1932年御影師範卒	疎開付添
1946年5月10日～1947年3月31日					
組合長	中山延二	53	西須磨国民学校長		疎開付添
闘争委員長	安平房治	43	川中国民学校訓導	1924年御影師範卒	
代表委員会議長	上村千彦	47	吉田国民学校長	1921年御影師範卒	
代表委員会副議長	清瀬波男	50	雲中国民学校長	1917年姫路師範卒	
事務局長	小柴弥作	35	諏訪山国民学校訓導		
事務局次長	小塚 誠	34	東灘国民学校訓導		
常任執行委員	東 悦夫	35	入江国民学校訓導		
〃	吉田友三郎	35	山手国民学校訓導		
執行委員	浜田芳郎	35	神戸国民学校訓導		
〃	岩槻五朗	32	浜山国民学校訓導	1933年御影師範卒	疎開付添
〃	宮田静吾	38	西須磨国民学校訓導	1929年姫路師範卒	疎開付添
〃	藤橋雅秋	35	川池国民学校訓導	1932年御影師範卒	事務要員
〃	小谷 強	35	雲中国民学校訓導		
〃	田中正美	不明	不明	不明	不明
財務委員	金井憲太	37	湊川国民学校訓導	1928年姫路師範卒	疎開付添

出典：役職名、人名、在籍校は『神戸教組35年のあゆみ』。年齢等は「昭和20年度 教員台帳」で補充した。なお在籍校は『神戸教組35年のあゆみ』を訂正した箇所がある。

表4は組合役員の詳細、年齢、役職、出身学校、疎開時の担当を調べたものである。校長は別として、35歳前後の教員が組合の中心になっており、学歴でいうと1932年前後に御影師範学校（一部に姫路師範学校）を卒業した者が大部分を占めていた。師範学校以来の強い人的結合があったものと思われる。そして戦時中は学童疎開の付添教員として教育にあたっていた。彼らが神戸の組合と戦後の教育の中心的な担い手になっていくのである。

5 教員の適格審査

兵庫県における教職員の適格審査はどのように実施されたのであろうか。1945年10月の占領

軍の覚書「日本教育制度ニ対スル管理政策ニ関スル件」「教員及教育関係者ノ調査、除外、認可ニ関スル件」を受け、46年5月7日勅令第263号「教職員ノ除去、就職禁止及復職等ノ件」が公布された。適格性を審査する機関として都道府県教員適格審査委員会などが設置された。都道府県教員適格審査委員会は国民学校、青年学校、中等学校、視学官、視学を審査するものであった。この委員会の構成は、教員代表7名（国民学校、青年学校及び中等学校の教員のうちから大日本教育会が推薦）、各界代表6名（教育団体、産業団体、宗教団体等から地方長官が選定）で構成されていた。兵庫県の場合、教員代表は田岡新（神戸市神戸国民学校長）、植永順次（神戸市菊水国民学校教頭）、久村英夫（神戸市長田青年学校長）などであった。田岡は1911年御影師範卒で57歳、植永は1919年姫路師範卒で45歳、久村は1927年関西大学卒の45歳であった。田岡は神戸国民学校の校長であり神戸市を代表する校長であった。植永は1945年3月に菊水国民学校教頭に就任し、戦後にいち早く菊水国民学校が新教育の在り方について研究し同校が新教育実験校になったことについて功績があったためであろう。久村はなぜ選ばれたのかわからないが国民学校以外の校種の代表としての起用であったのだろうか。各界代表は神戸商工会議所理事の岡部又蔵、兵庫県婦人会役員西牧ユキヨらであった。委員長には岡部、副委員長には田岡、西牧が就任した。兵庫県教員適格審査委員会は17,941人を審査し18名が不適格となった。中央教職員適格審査委員会の判定や差戻で結局11名が最終的に不適格となった。著書、論文など活字として残されたものが証拠となった。適格性の判断基準では「教師が教室で行った講義は問題としない。」「論文や著書・放送内容などは対象となるが、その意図・目的が問題となるのであって、特に大きな影響があったものについて検討する」などとされていた。²⁰⁾

審査数に比較して不適格者の数が少ないのではないかという意見が占領軍内部からもあった。1946年12月2日付の民政局の覚書は「審査を受けた人数に比してパージされる人数が少ないことは教員適格審査に根本的な欠陥が存在することを示唆している」「1945年10月30日の教育パージの指令とその指令を実施に移す1946年5月7日の勅令の公布との間の6か月の時間差が指令の効力を薄め文部省の役人の決意を弱めさせた」「勅令第263号の下で確立された適格審査システムと文部省に対する適切な監視システムの欠如が根本的な欠陥であると思われる。」「（都道府県教員適格審査委員会の）残りの委員、つまり多数派は大日本教育会が指定する7人の委員によって構成される。」などと教職員適格審査の在り方を非難し、適格審査の所管を文部省から公職適格審査委員会に移管すべきだと勧告したのであった。この勧告は取り上げられることはなかったが、兵庫軍政部からも委員会が不適格者をあげないことに不満の意が表明された。これに対して、委員会は「終戦後教員退職者数」を提出し不適格者はすでに自発的に退職していることを示そうとした。²¹⁾

兵庫県教員適格審査委員会で不適格とされた例を示そう。神戸市立第一神港商業学校長大槻昌一（東京高商卒、1946年度で53歳）は1940年の着任早々から戦争協力に熱心であった。1947

年3月4日付で不適格が認定された。「察するに、戦時下教育の推進に積極的な協力のあまり、一部の者の反感を買ったものと思われる。」「大槻校長は意思強固な行動的な人であったようで、就任早々からばりばり仕事を進めている。その発言内容からも、個我滅却、大義に生きるといった気魄が感じられる。」²²⁾大槻は同年10月30日付で免職となった。その後、49年6月17日、中央教職員適格審査委員会によって不適格者の判定が取り消され適格者である旨の判定が出された。これによって、神戸市に復職することも可能であったが、大槻は校長に復職せず49年9月5日付で退職し実業界に転じた。

大槻昌一校長のような、戦時体制に協力的な教員は多くあったであろう。大槻の場合、むしろ仕事の進め方に反感を買う要素があったのかもしれない。また適格審査委員会の委員のうちにも、戦争中の役割を考えると戦争協力者であったとされる可能性もあり得たのではなかろうか。委員会は不適格者の端緒をつかむために投書を奨励したりしたので、反感を買っていた場合は垂れ込まれることもあったであろう。教員適格審査はどこまで本気で不適格者を追及するのかという問題でもあったと思われる。校長、視学の職にあった者は軍国主義的、国家主義的教育の推進者として一律に不適格というやり方もあったろうが、占領軍はそこまでやろうとはしなかったのである。

6 教育委員会制度の発足

周知のように教育委員会制度は、戦前の教育行政の中央集権的、官僚的、画一主義的な仕組みを改めようとして制度設計された。この教育委員会制度に神戸の教員たち、とりわけ教員組合がどのようにコミットしていったのだろうか。

1948年7月に教育委員会法が成立し、教育委員が公選されることになった。都道府県及び五大市は10月5日に選挙が行われた（兵庫県下では西宮、伊丹等でも選挙が行われた）。兵庫県は6人の委員が選挙されたが、そのうち将積茂二は魚崎小学校長、安平房治は神戸市立長狭中学校長、賀須井千も神戸市在住の教員であった。神戸市では4人の委員の選出が行われたが、松本省一は摩耶小学校長、中山延二は神戸市学務課長、神戸第三中学校長宮地雄吉という教育関係出身者であった。神戸市の投票率は43.1%であった。1950年11月10日に執行された第2回の神戸市教育委員選挙（2名改選）の投票率は21.9%という「惨憺たる投票率」（神戸市教育委員会『教育年報』昭和25年度）となった。²³⁾

兵庫県の公選委員選挙にあたっては、兵庫県教職員組合は将積茂二、安平房治、永田亮一（農業）、実生すぎ（兵庫軍政部顧問）を候補者に決定した。非教員2名の擁立は民主主義の観点からは後退の面もあったと後に評価している。組合擁立候補は全員当選し、非推薦であったが教員出身の賀須井千も高校をバックにして当選し、組織選挙の強さを示した。

教育委員会制度の問題点の一つは教育委員会に対する県民、市民の関心の低さであった。「従来の県庁や市役所が教育行政を担当していた時と、何がどれほど変わったのか」が県民、市民

に理解されなかったと神戸市の教育委員会は評価し、教育委員会に対する無関心の原因を徹底的に調査し将来その解決に専心努力が必要だとしていた。

第二の問題点は教員組合が擁立した教員が委員の多くを占めるということであった。1948年10月5日の教育委員選挙についてある教員組合の役員は思い出を語っている。「当時選挙運動については、何の制限もなかったため、組合員はトラック上から街頭演説をぶち、授業終了後手に手にプラカードをもって、「県には安平」、「市には中山」と威勢よろしく街頭をねりまわった。」公選委員4名中3名を獲得するという大勝を博したが問題がないわけではなかった。「(教員の選挙運動について)有識者や財界の顰蹙を買い、後の公務員に対する選挙運動の制限になって表れてくるのである。第2に公選委員4名中、3名までが教員出身者で占めたことは、教育全般が教育者いや教員組合の支配下におかれることを危惧し、教育界を除く、あらゆる階層から強い反発を買うに至ったのである。」(福田強の回想)。もっとも、『兵教組十年史』は、教育委員の選挙活動を通じて、教育委員会法の意義を県民に訴えたこと、「教育を国民の手に」との呼びかけを行ったことなどを選挙運動の成果だったとしている。²⁴⁾

教育委員会への無関心、理解の低さは現在にまでつながってくる問題である。現在においても市民、いや教員も含めて教育委員会や教育行政に深い関心をもっているとはいえないだろう。

教員の選挙活動の問題も後々まで問題となった。教育委員会委員は任命制となって制度が改変されたが、教員は政治活動を活発に行った。文部省は政治活動を規制しようとするのである。

これらの問題の原点が教育委員選挙に表れているのである。

7 教師たち

(1) 木戸只一～教育行政の担当者

木戸只一は神戸市の出身ではない。神戸に縁もゆかりもなかった人物が1941年に46歳で神戸市視学に就任してから戦時体制下期、戦後の教育復興期、経済成長期の教育と長期にわたって神戸市の教育行政を担うことになった。没後に『教育者 木戸只一先生』という木戸の業績を讃える本が出版されたことでも分かるように周辺の人物たちに敬慕されていた。²⁵⁾

木戸は1896年愛知県渥美郡杉山村に生まれた。1917年愛知県第一師範学校を卒業し若戸尋常高等小学校の訓導となった。1922年に東京師範学校理科第二部に入学し24年に29歳で卒業した。卒業と同時に群馬県立館林中学校に赴任した。翌年に故郷の愛知県立小牧中学校教諭に転じる。1937年に愛知県立丹羽高等女学校の校長に就任した。ここまでは向学心に燃え、教員としても順調な出世を遂げた教員であったことが推測される。1941年1月に校長を辞任し神戸市の視学に転じた。女学校の教員や生徒から木戸の退職を惜しむ声が寄せられている。「私は一人で神戸で頑張ります。神戸には約一二十万人の小学校の児童が居ますが、その一人一人を皇国民として立派に育てあげなくてはならないと信じて、私は驚馬に鞭うちながら働いてゐます。私の背後には皆さん方一千五百余名の応援があると信じつつ。」²⁶⁾ 神戸市に入り戦時体制の中

で視学の職務に努力した。ことに戦争末期の学童疎開に尽力した。木戸は疎開のほとんどのことを担当しテキパキ事務を処理していたという。受け入れ先の県、町村などとの折衝をはじめ、疎開先の視察などを精力的に行った。「どの子供も青白くやせ細り、みんなサルのような顔つきになりましたね。あの2～3年間の混乱期はもう無我夢中でした。」

45年3月に木戸は学務課長に就任した。木戸はことに空襲で孤児となった子どもたちの行く末を案じていた。三木に有隣学舎が開設され学校の分教場として運営されることになったのも木戸の尽力があつたことだろう。木戸はしばしば休日に子どもたちの様子を見に愛隣学舎を訪問した。

木戸は47年2月から生田区長に就任したが同年8月に教育局長になり神戸市の教育行政の責任者になった。翌48年11月1日に神戸市教育委員会が発足し教育長に就任した。新制中学の設置、増大する児童生徒の収容対策、民主主義教育の推進などに邁進することになる。

「無一物になった日本の再建は人間だ教育だよ」といい、教育復興に情熱を燃やしていたという。神戸市教職員組合の執行委員長だった岡本博美は木戸の教育行政の特色を①教育神戸の建設に教育長は生涯を捧げるといふ決意が感じられた。②「教育は人なり」の信念のもとに、教師がもっとも活動しやすい条件づくりに腐心した。③教育長と教職員組合との間に温かい血の通うものがあつた。と述べている。当時文部省の官僚であり学校建築の件で接触のあつた文部省の官僚は、「行政官というよりも教育者としての印象が強い。全国の教育長の集まりでも、木戸さんは啖呵をきるというタイプよりも諄々と説く教壇人のイメージが濃い。…最近教育行政はともすれば法律に走り、人間を育てる教育的感覚に乏しくなっているやに見られがちであるが、木戸先輩のような教育行政人を懐かしむものである。」と言っている。

木戸は1957年に教育長を退職し、教育委員に就任した。教育委員を退任したのは1971年のことであつた。木戸は1951年度の『教育年報』の巻頭言で新教育の実現に今一步の物足りなさがあつた。校舎の建築、施設の整備についてもなお不満足な点が多々あつた。教育者の質の向上、待遇の改善についてもそうである、と述べ「不満足の満足」と語つた。目標にとつても達していないけれども与えられた条件の中で最善を尽くしているということであろうか。残念ながら戦前の教育について何が誤つていたのかについて木戸は語っていない。教育長、教育委員長としての立場が発言を控えさせたのだろうか。²⁷⁾

戦時中に神戸市の視学であつた人に白川渥がいる。白川は愛媛県出身で詩人になろうとして上京したが、折からの不況で世をしのぐ方法を考えなければならなかつた。豊島師範を経て東京高等師範学校を卒業し、鳥取師範教諭ついで東京国民精神文化研究所に務めた。たまたまの縁で兵庫県精神文化研究所に職を得て、その後御影第二小学校校長になつた。2年間校長を務めた後、神戸市視学に転じる。白川はもともと文学希望であり横光利一に師事していた。神戸に来て白川は神戸小学校の文学好きの教員、若林慧（戦後の神戸小学校の校歌の作詞者）と知り合つたりする。敗戦とともに白川は神戸市を辞め文学一本の生活に入った。白川が再び神戸

の教育と関わることになるのは、1972年に教育委員になってからである。白川は自叙伝で戦争中のことには触れていない。²⁸⁾

(2) 中山延二～教員組合の執行委員長を務めた校長

中山延二（のぶじ）の文章は少なくとも筆者には分かりにくい。仏教哲学が全面に出てきて容易には意味を捉えがたい。彼は教育者であるとともに、戦後になって京都大学から仏教哲学の博士号を授与された学究でもあった。中山も時代の激変によって、現場の教員でない様々な職務に従事することになる。

中山は1894年但馬の竹田に生まれた。1915年御影師範を卒業し神戸市の教員となった。六甲国民学校長などを経て1943年12月雲中国民学校の校長になる。学童疎開では水際立った指揮振りを発揮した。学童疎開の受け入れ先との信頼関係を大切に、付添教師の人選には慎重な態度で臨み、疎開地に出発する前に10日間ほど疎開教育について付添教員の研修を自ら行った。付添教員の疎開宿舎の割り当てにも配慮した。雲中の保護者が児童の面会に岡山に来るときは、「現地奉仕」といって神戸で集めた物資を運び奉仕作業をして帰ることにした。どの学校でも疎開地で物資を買い集めて神戸に帰る親が多く、その対策に困っていたのである。中山は雲中の疎開を成功に導いたのである。

戦後になって、神戸市の教員組合が結成された際に彼は副組合長、ついで組合長になった。前述したように当時は校長も組合員になれたのであるが、もちろん中山の人望、手腕によるのであろう。神戸市国民学校教員組合長のときに学校に出した文書が残っている。一つは1946年6月15日付の、組合員の「所属したことのある政治的又は思想的団体」の調査を組合員・学校長に依頼したものである。これは兵庫県からの指示であった。もう一つは9月20日付の「兵庫県教組連盟主催 第一回教員文化講習の件」で組合が企画し主催する初の講習会であり、「再建教育への力強き拍車たることを信じて疑ひません」としている。講習の中には「進駐軍軍政部」のスターンが「日本の教育者に告ぐ」という演題で通訳付きのものもあった。行政研修でない、組合が主催する研修会を実施しようとする意欲が表れているといえよう。²⁹⁾

中山は46年に西須磨国民学校に異動し、47年には木戸の後の学務課長に就任した。組合長から一転して教育行政の担当者になったのである。彼がどのような学務課長であったかわからない。48年に教員組合から推され教育委員の選挙に立候補しトップ当選した。以後8年間教育委員の職にあった。

中山には多くの著作があるが直接教育に触れたものは少ないようである。1949年の「神戸市教育委員会だより」第4号に教育委員として掲載した「常不軽」という文章では、人間は共に生きるものであるとともに、他面においては個独的なものを担っている。「人は個独的であると同時に社会的、共にであると同時に個人的であるということが出来る」と述べはなはだ哲学的であった。1965年の著作では「思い返せば、わが国の民主主義の発足は敗戦による実に急

転直下のことであった。それは欧米のごとく自我の発見とか、自覚というような近代をもたないで、旧世代が一転して、突如民主主義ということになったのである。いわば準備もなしに、封建から一気に急転した民主主義とってよいのであろう」と述べている。³⁰⁾

(3) 吉田友三郎～愛護教育に尽力して

吉田友三郎はおそらく戦時中にすでに訓導として目を置かれた存在であったかも知れない。筆者は先に吉田が山手国民学校で学童疎開を引率した際の「疎開日誌」を紹介したが、吉田の的確な判断力、地元や上司等に対する気配り、旺盛な行動力などに感心した。実務的な能力に長けた人物に思えたのである。

疎開の引揚からほどなく神戸市の教育組合の結成にあたって吉田は組合結成準備委員36人の一人として名を連ねている。組合が結成されてから1947年3月末まで執行委員を務めた。1946年9月に兵庫県教育民生部教育課から教育優秀校推薦の依頼が神戸市にあつて、神戸市は教育優秀校を調査し、その一つとして山手国民学校をあげている。山手校の優秀な教育実践は社会教育の部門で校外教育（方面教育）が「特に優秀なる方面」とされており、その実践の担当者が吉田友三郎なのであった。戦後、子どもたちの非行が問題となっており1946年度は刑法犯に占める少年の数が激増した年であったのである。神戸市は「家に帰れ」「学校に帰れ」の運動を展開した。問題児の多くが敗戦後の混乱した社会から発生したもので、犯罪、不良化の低年齢化が指摘されていた。吉田は非行防止に取り組むことの意義を見出していたのであろう。

吉田は山手校（国民学校、小学校）に21年間在籍し1953年に雲中小学校に転任した。雲中小学校には1年だけおり、54年教育困難校である室内小学校長になった。41歳で神戸市の最年少の校長であった。吉田は5年間この学校に在籍し「神戸市愛護教育連盟」の創設を提唱した。愛護教育について吉田はこう語っている。「(愛護教育は)決して一部のものの教育でもなければ、特別変わった教育技術を意味するものでもない。むしろ、教育本来の姿である。“小中学校の教育が公教育として、本然の機能を回復し、学校が真にこどもの幸福のための学校になる。”そこに愛護教育の課題がある。」教育基本法は、教育は直接国民に責任をもつと規定しているが、公教育の理念がついに理解されず教育法規は空文にとどまっているところに現在の学校教育の混乱と退廃があると述べた。

1959年、勤評闘争について吉田は「教師の眼が子どもたちや大衆の生活の方を向くよりも、監督庁や校長や権力者を向いていた歴史は長い。…勤評反対闘争は、闘争のための闘争に墮することなく、教師一人一人の民主教育確立の戦いとなってほしいものである。」と述べたそうである。

その後吉田は教育委員会教職員課に異動になり、神戸市教職員の人事行政を担当することになった。吉田は人事について、「適所の人を生かすこと」が人事だといっている。1969年教職員課在職中に吉田は病気のため死去した。³¹⁾

(4) 氷上正～国語教育に生きる

氷上（ひがみ）正は戦争中、若宮国民学校の教師であった。1933年の御影師範卒の33歳で、若宮国民学校は龍野町に疎開していた。1944年秋から学童を引率していたのである。食料事情は次第に窮迫し子どもらの帰心は募っていった。年末のある日、市議員らが慰問にやってきた。校長は子どもらがついた鏡餅一つを市議員に土産として渡すことにした。「相手が市議員だといっても、何というひどいご機嫌とりをするのだ。…私は涙が出るほど腹が立った。…こんな不愉快なことは疎開後はじめてであった。」

疎開中にも氷上はよく歌を詠んだ。

朝朝に子らがとなふる寮訓を我がつくりしゆゑに悲しも
すりきれし草履をはける子どもらの此の頃とみにやせしとぞ思ふ
この事実をいかにか告げむわが家のいまだ焼けずと思へる子らに

若宮国民学校には45年の12月末まで在籍した。41年には氷上が中心となって「アジアの光」という脚本をつくり、他の教師からも協力してもらって各国の歌やダンスも取り入れた。大東亜共栄圏の思想を盛り込んだものであった。

42年に国語研究会が若宮国民学校で開かれた。氷上は教材に万葉集を選んだ。万葉集を研究していた氷上は万葉集を軍国主義の材料にはしたくなかった。教科書が取り上げていない歌を教材にしたが、軍国主義にさからうようなことはできないので、無難に切り抜けようと思った。このように研究授業の苦心のほどを述べている。

46年1月から氷上は垂水国民学校に異動した。大規模な学校で教室が足りないために二部授業が行われていた。朝に全教員がそろうことはほとんどなかった。職員室でもほとんど教育上の雑談がかわされることもなかった。話は、食糧不足のこと、闇市のこと、物価の高いことであつた。教師のなかにはさまざまな人がいた。早番の授業がすんだらリュックサックにいっぱいつめた衣料を売りに行く者、質屋を開いたりする者もいた。

戦後の数年間、氷上の教育活動は低調だったという。食うために住むために精一杯で教育のことに頭を使っているひまはなかった。憲法や学校教育法が制定されたことにも、新教育の動向にも無関心で、指導要領が作られたこと、日本教職員組合が誕生したこともまるでよそごとであった。「ただ流されるままにその流れに身を任せているにすぎなかった」

新制中学校の発足に当たって氷上は鷹取中学校に転任させられる。戦後の低調な状態から氷上は抜け出していくのは3年後に再び小学校に転任してからだった。戦前に取り組んでいた綴り方教育、国語教育に彼は教師としての生きがいを見出していったように思う。「そのころ私は、ことばをもっともっとだいじにしなければならない、国語教育は、ことばに対する感受性をゆたかにもたせることにあると思っていた。文章の中には抜きさしならぬだいじなことばが

ある。そのことばから考えられるもの感じられるものを深く深く追求することが、国語教育でいちばんだいじなことであると思っている。」後年、彼が校長を務めた御影小学校は国語教育で全国に名を馳せる。御影小学校で10年間校長を務めた。彼の学校経営、国語教育は毀誉褒貶が相半ばする。斎藤喜博の亜流だという者もいれば、国語を学校経営の中核にすえた立派な学校経営者だと賞賛する者もいる。彼の在任中、公開研究会を8回やり、学校・グループ・個人の著作は12冊になった。³²⁾

おわりに

教師たちの戦後の生き方は様々であった。戦後とともに教師の生活に見切りをつけ転職した者もいる。児童数の減少のために退職を余儀なくされた者もいる。戦災孤児の教育に生涯をかけた教師もいる。教員組合の結成に参加し組合役員になり、その後国会議員や市議員になった教師もいる。³³⁾ 戦時中は視学を務め戦後は神戸の教育行政の責任者になった人物もいる。時流から離れた場所において、ひたすら国語教育に情熱を注いだ教師もいた。

戦前と戦後はどうつながっていくのだろうか。どこで切れどこでつながっているのか。戦前の体験は教師の行動にどう影響を与えたのか。教師たちは戦時下の「皇国民の錬成」から「民主主義教育」に適応しただけなのだろうか。それとも新教育に心から共感し新教育の推進者になっていくのだろうか。個人の生き方は連続か不連続かといったような一刀両断的な、二分法的な結論を拒否しているように思われる。戦後の状況に複雑に対応していったのだろうが、筆者は今後もこの問題と考えてみたいと思っている。なお、本書で利用した伝記、自叙伝等については客観性において問題がありものもありえよう。教育者の伝記は多くは薫陶を受けた賞賛者によって書かれているし、自伝は都合の悪いことが省かれている場合もありうる。可能な限り他の資料とも付き合わせていきたい。

最後に、神戸市の教員ではないが東井義男について述べたい。原芳男・中内敏夫は転向者として東井をとらえる。上級学校を目指し上昇意欲にあふれた時期、上昇意欲が挫折し綴方教育に取り組み左傾化した時期、左傾から一転して『学童の臣民感覚』を執筆した時代、戦後の沈黙の時代を経て、『村を育てる学力』により教育界の寵児になっていく時期に区分している。中内らは東井の戦後の沈黙を一種の贖罪意識と捉えている。東井は左傾化した時代には特高警察の影におびえたであろう。戦後は教職追放の可能性もあったかもしれない。なぜなら著作の形で軍国主義的教育者の証拠を残したからである。東井の沈黙の意味を考えてみなければならぬであろう。³⁴⁾ しかし東井は神戸新聞の自叙伝－それは一般の読者が読み手として想定されるものだが－では『学童の臣民感覚』、あるいは戦争中の自己の思想と行動には一切触れていない。そこに東井義男、あるいは教育界の限界がある。

(注)

- 1) 戦争直後の神戸市、兵庫県の教育については、神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史 第二集』(1964年)、兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』(1963年)がもっとも詳しい。しかし、これらを執筆した際に利用した資料はほとんど残されていないのは残念である。戦後改革に関する文献は枚挙にいとまがないが、さしあたり占領政策との関係で土持法一解説・訳『GHQ日本占領史 第20巻教育』(日本図書センター、1996年)をあげておく。
- 2) 武本力の回想は神戸市立下山手国民学校学童集団疎開を記録する会編「学童疎開の思い出」(1980年)に収録されている。
- 3) 灰谷健次郎は神戸市の小学校の教員であった。妙法寺小学校、東灘小学校で教鞭をとった。『兎の眼』には東灘小学校を彷彿とさせる記述もある。(角川文庫、1998年)172、173頁。
- 4) 「国民学校児童収容替臨時措置案」については、洲脇一郎「神戸空襲と国民学校」(『神戸親和女子大学教育センター紀要』第6号、2010年3月)が明らかにした。
- 5) 神戸市の児童の身体検査の結果は『神戸市統計書 第22回』のほかに前掲『神戸市教育史 第二集』351~353頁。身長、体重、胸囲、座高の1947年、1955年、1961年の比較や疾病・異常の率推移の表が掲載されている。
- 6) 前掲『神戸市教育史 第二集』155~157頁。
- 7) 前掲「神戸空襲と国民学校」参照。
- 8) 記念誌編集委員会編『雲中―「いさご」特別号―』(1954年)83頁。
- 9) 神戸市学務課「昭和二十一年五月一日現在 教員台帳 国民学校之部」。
- 10) 「神戸市会議事録 昭和19年」。1944年2月28日の議事録。
- 11) 前掲『神戸市教育史 第二集』616、617頁。
- 12) 前掲『兵庫県教育史』645、648頁。
- 13) 前掲『兵庫県教育史』、『神戸市教育史 第二集』。
- 14) 木戸只一先生追憶編集委員会編『教育者 木戸只一先生』(1986年)72~74、103~105頁。箸方のほかのもう一人の教員は垂井良一である。垂井は1945年12月に平野国民学校の訓導となり、1947年から5年間に隣学舎に勤務した。後に神戸市立蓮池小学校長などを務めた。
- 15) 神戸市多井畑国民学校「昭和二十年度以降 公文書綴」。
- 16) 同上。
- 17) 神戸市立長田南小学校保管文書。
- 18) 菊水国民学校「昭和二十年度 学校日誌」。西郷国民学校「昭和二十年度 学校日誌」。
- 19) 前掲多井畑国民学校「公文書綴」。
- 20) 前掲『兵庫県教育史』723、724頁。なお、教員の経歴等については「昭和二十年度 職員録」等によって補った。
- 21) 占領軍の記述については、Government Section, Memorandum to the chief, administration division, Comments on Educational Purge. (1946年12月2日付)。退職者数は前掲『兵庫県教育史』722,723頁。
- 22) 『神港60年史』(1967年)137~139頁。
- 23) 神戸市教育委員会編『教育年報』第4号(1950年)。
- 24) 「神戸教組35年のあゆみ」編集委員会編『神戸教組35年のあゆみ』(1981年)9頁、兵教組十年史編集委員会編『兵教組十年史』(兵庫県教職員組合、1960年)56~63頁。
- 25) 木戸の経歴、追想については前掲『教育者 木戸只一先生』を参照。

- 26) 前掲『教育者 木戸只一』53頁。
- 27) 『神戸市教育年報』第5号、
- 28) 神戸新聞学芸部編『わが心の自叙伝 二』（のじぎく文庫、1968年）59～76頁。
- 29) 中山延二の学童疎開中の行動については、前掲『雲中—いさご特別号—』が詳しい。中山の経歴等に関しては、甲陽会編『明治・大正・昭和を生きた兵庫の教育者』（1991年）106～121頁がある。
- 30) 中山の仏教関係の著作は多い。引用は中山延二『開』（百華苑、1945年）13頁。
- 31) 前掲『明治・大正・昭和を生きた兵庫の教育者』294～322頁。吉田は学童疎開を引率して「疎開日誌」を残している。洲脇一郎「神戸の学童疎開～日誌・写真・記憶」神戸親和女子大学『国際教育研究センター紀要』第2号、2016年3月）が詳しく紹介している。
- 32) 氷上正『聞く双書11 私の教師生活の回想』（明治書院、1976年）。
- 33) 初期の組合役員から議員になった者に、東悦夫（神戸市会議員）、小谷守（参議院議員）がいる。
- 34) 原芳男・中内敏夫「教育者の転向」（思想の科学研究会編『共同研究転向5 戦後編上』、平凡社、2013年、211～266頁）。東井の自伝は、神戸新聞学芸部編『わが心の自叙伝 一』（のじぎく文庫、1967年）に所収。